

持続可能な
循環型社会を
めざした
商店街システム作り

chigasaki



歩いて暮らせる
歩いて楽しい
商店街・まちづくり

茅ヶ崎市商店会連合会の取り組み

氏名：岩澤 裕
茅ヶ崎市商店会連合会会長

目 次

商店街の元気アップの糸口	31
1. まちをつかむ	31
2. 持続可能な循環型社会をめざした商店街システムづくり	
エコ・シティ茅ヶ崎をめざします	32
①「茅ヶ崎リターナブルワイン」の発売	32
②生ごみの堆肥化実験	34
③made in chigasaki 自転車	34
④マイバッグの推進	36
3. 歩いて暮らせる商店街、歩いて楽しい商店街づくり	
ひととまちのコミュニケーションをはかります	37
①商店街のカルテづくり	37
②2005年は北側も実施	37
③七夕笹飾り	37
④ゆかたを着てまちのお祭りに出かけよう！	37
⑤茅ヶ崎オリジナル花火の絵コンテスト	38
⑥茅ヶ崎汁	38
茅ヶ崎の商店街づくりは私たちの手で	38

商店街の元気アップの糸口

今考えると、私が茅ヶ崎市商店会連合会（以下商連）会長になって6ヵ月後、1999年は茅ヶ崎の商業の転機の年でした。この年大店法から大店立地法に変わるということで、ジャスコが駆け込み出店する話が持ち上がりました。この時大型店の占有率は70%で、神奈川県内1位でした。

（商連加盟商店街23・商店数1000）

初めて商連は大型店出店に反対しました。しかも消費者団体連絡会のみなさんといっしょに。消費者のみなさんの口から「まちが壊れる」「まちに商店街がなくなる」「ジャスコより公園を！」を聞いたときは驚いたというより半信半疑でした。駅で署名をとり、大店審へ要請に行き、市議会へ出店反対の請願を出し、シンポジウムを開催しました。夏のさなか商業者と消費者はいっしょに暑い汗をかきました。しかし、すでに時遅くジャスコの出店は許可になりました。

このとき、反対だけで終わっていたら今茅ヶ崎の商店街がどうなっていたらどうか？

「分からない」というのが正直な気持ちです。商連は「反対しているだけではダメだ、商店街が元気になるまちづくりに取り組もう」と直ぐに行動を開始しました。

そもそもバブルの時は市民が何を考え、どんな活動をしていたのか、商業者は知る必要もありませんでした。何も考えなくてもシャッターを開ければお客が待っていました。その後続く失われた十年。いつのまにか、商人とお客様の間には深く長い溝ができていました。

解決の糸口はまちを知ることになりました。商店は配達やお客様とのやり取りから得たまちの情報通です。しかし、まちづくりという視点がないために情報は生かされていません。まちの資源や問題点を探してまちを歩く。するとまちが見えてきます。これも初めてですが、市内で活動している団体と話し合うと、みなさん先進的で、テーマについては専門家より詳しい、しかも地域情報をつかんでいます。解決策を提案しています。

1. まちをつかむ

商連も茅ヶ崎のまちが見えてきました。茅ヶ崎の問題をつかみ問題を市民のみなさんと解決する頼られる商店街づくりをめざしました。住宅ができて、生活に必要なものを売るお店ができる。お店が集まるとお客様も1箇所で買い物ができて便利。自然発生的に商店街ができる。

街が暗く危ないから街路灯を付けたい。一人では無理だから会を作って相談しよう市とも話し合いをしてみよう。商店街は問題解決のためにできたケースが多いのです。もともと商店街はまちの困った問題を解決してきたのです。



そこで三つのコンセプトをつくりました。
「困った」問題の解決から未来につながるコンセプト

茅ヶ崎市商店会連合会のコンセプト

「ひと」と「まち」のコミュニケーションをはかります。
エコ・シティ茅ヶ崎をめざします
緑いっぱいのまちづくりをします

2. 持続可能な循環型社会をめざした商店街システムづくり エコ・シティ茅ヶ崎をめざします

2001年「元気アッププロジェクト」に取り組みました。このプロジェクトが今の商連の基礎になっています。

2002年度、商連は神奈川県補助金を活用し中央大学経済学部教授とゼミ生・神奈川県環境科学センター・地域コミュニティの専門家、消費者・学生・行政・商業者でエコ・システム研究会を立ち上げました。

経済と環境の関係を明らかにし、持続可能な循環型社会をめざした商店街システムづくりを検討しながら、具体化してきました。

- リターナブルびん推進・茅ヶ崎リターナブルワインの開発
- 地産地消をめざして・商店街の生ごみの堆肥化
- 自転車を利用しやすいまちづくり・made in chigasaki 自転車の開発
- マイバッグの推進・エコ傘マイバッグづくり

などに取り組んできました。

①「茅ヶ崎リターナブルワイン」の発売

当時、エコに取り組む商店街はまだ一般的ではありませんでした。「環境にやさしい商店街をアピールする」として取り組んでいる商店街がいくつかあり、注目されていました。

環境団体「ちがさき・ごみ会議」との話合いの中からリターナブルびんの推進に取り組むことになりました。消費者は「酒屋さんは配達をしたくない」と思っていました。酒屋さんは「安さだけでなく環境を考えびん製品を使いたい」と思っている消費者がいること

を知りました。

缶やペットボトルは安価で使い捨て、大量に販売する大型店が作り出した商品です。大型店向けに便利な流通システムをつくり、消費スタイルを提案した結果びんは酒屋とともに姿を消していきました。

商連は温暖化や環境悪化を心配する市民団体と一致しました。酒屋には環境に優しいびんを増やすことが、大型店に対し、生き残る道であり、商品なのです。「環境と経済の元氣アップは同じこと」だったのです。

茅ヶ崎からリターナブルびんの推進を発信

商連は早速、茅ヶ崎市消費者団体連絡会、茅ヶ崎市酒販組合に呼びかけ、使い捨てをやめて、缶からびんへ（ビールびん、一升瓶の推進）一びんからリターナブルびんを使う暮らし方をしよう！と提案しました。

「ビールは環境にやさしいびんビール」二酸化炭素を減らす

「ビールはおいしいびんビール」びんは缶の匂いや環境ホルモンの心配がなくおいしい

「ビールはお得なびんビール」ビールびんをお酒屋さんに返すと5円が戻ってくるデポジット制

びんビールは重いので酒屋はお客様に配達サービスをしている。

駅頭でのキャンペーン、議会へ「びんと缶の分別収集に関する請願」を提出、全会一致で採択。（2002年6月）

「環境にやさしい茅ヶ崎ライフスタイルを考える懇談会」を開催し、市民・環境団体・自治会長・市会議員・行政・マスコミ・全国びん商・神奈川酒類容器協同組合・日本ガラスびん協会・酒販組合・商連など商業者100人以上が集まり、茅ヶ崎の環境について大いに語りあいました。これがきっかけになりリユースされず路盤材にしかないワインのびんを回収しようと、「茅ヶ崎リターナブルワイン」の開発に取り組むことになりました。

持続可能なまちづくりには地域経済・地域環境・地域コミュニティが必要です。

地域のびん商さん・問屋さんの協力は直ぐに得られましたが、ワインメーカー探しが大変でした。あたたった大手のメーカーにはすべて断られました。

リターナブルびん回収システム



リターナブルびんの回収システム

酒屋、びん商、洗びん商、メーカー、問屋さんと検討・協力してできた茅ヶ崎独自のシステムです。

生産・販売・消費・廃棄の全過程で環境に優しいシステムをつくりました。



茅ヶ崎リターナブルワインのラベルを一般公募、市役所ロビーでラベル展示会、関係団体で共同声明、調印式。記者発表、広報「ごみ通信」にびんを回収する全酒屋を掲載などめまぐるしい展開でした。多くのみなさんの力で茅ヶ崎リターナブルワインが発売になりました。(2002年11月)

リターナブル瓶を利用することで茅ヶ崎のごみを減らし、温暖化を防ぐことにより、海岸の浸食を防ぐことがこめられています。

今は酒販組合リターナブル企画が事業を引き継いでいますが、全国的にも珍しい取り組みを評価され、今年からガラスびんリサイクル促進協議会とともに商連も参加して経済産業省、環境省の支援を受け実験事業を行っています。

②生ごみの堆肥化実験

システム研究会で専門家の意見を聞き学習会を重ね、手づくりですから安全につくることにこだわりました。生ごみの堆肥化実験を3回行いました。(2003、2004、2006年)

市の協力で市の土地を借りて商店街の生ゴミを堆肥化しました。商店街のお店の生ごみは、魚のあら・花屋の切り枝・飲食の残飯・米屋の糠・豆腐のおからなど種類が多く良質の堆肥ができます。茅ヶ崎市食品協会にも呼びかけ、環境産業と協力して6ヶ月ねかせて堆肥は完成しました。1回目は商店街を飾るプランターや商店街のイベントに活用しました。2回目は農家で柿の堆肥に利用。3回目は地産地消をめざし畑を借りて市民に呼びかけ茅ヶ崎野菜をつくる予定です。

③made in chigasaki 自転車

潮風を感じて走る自転車のまち茅ヶ崎

乗ればエコ・捨てればごみ—自転車の価値を見直そう

自転車は専門店

3km四方が平坦な茅ヶ崎では自転車は大活躍です。買い物・通勤に自転車が利用されています。北京にたとえられるほどです。しかし、まちも商店街も歩道がなく危険です。駐輪場も多くありません。

放置自転車・大型ごみ・不法投棄を合わせて毎年約1万2千台の自転車がごみになっています。

商連サイクルライフ研究委員会で潮風を感じて走る自転車のまち茅ヶ崎づくりを検討しています。

市民・慶応義塾大学サイクルK・ほっと茅ヶ崎準備室・宮田工業株式会社・神奈川県自転車商協同組合茅ヶ崎・寒川支部が参加しています。

■ 目的

茅ヶ崎を潮風を感じて走る自転車のまちとして行くには、どうしたらいいのか、自転車が最大限に利用できるまち・利用しやすいまちにするための環境づくりを考えます。

- * 『環境に優しい自転車のまち・商店街づくり』
- * 自転車が走りやすい・利用しやすい商店街・まちづくり
商店街・のきさき駐輪場づくり・レンタサイクル
- * 茅ヶ崎のライフスタイルを提案する made in chigasaki 自転車の開発・販売
- * 商店街の元気アップ

商店街のきさき駐輪場・商店街でお買い物するための駐輪場

市民の方々が商店街で買い物をする際、どこにでも気軽に止められる駐輪場が便利です。商店街のお店に止めて他のお店にも寄れる駐輪場を作りました。自転車で利用しやすい商店街として、またお客様の安全や利便性とお店とのコミュニケーションの場として設置しています。

商連レンタサイクル・市民の便利な足として利用できるリサイクル車

2001年—商店街で借りられる、市民のための「レンタサイクル・ちがさきしょうれん号」を6台設置しました。現在55台稼働中
made in chigasaki 自転車10台の試乗もできます。

茅ヶ崎潮風散歩ツーリング



自転車で利用しやすいまち、よりたくなる商店街をツーリングを楽しみながら考えます。

コースごとにグループに分かれ年2回の散歩ツーリングは「潮風とともに乗ればエコ、走れば元気」商店街のイベント

と合わせて市内を回ります。歴史や文化、旧跡はもちろんのこと商店街の発見にもつながります。今年度のツーリングは神奈川県相模湾アカデミーの委託事業として取り組みます。

made in chigasaki 自転車

茅ヶ崎生まれの自転車から始まる茅ヶ崎ライフスタイル
いい自転車に長く乗るものを大事にするライフスタイル

放置自転車や不法投棄の自転車を減らし、丈夫で軽く安全性にも気を配り長く乗りつけてもらえる自転車を開発、自転車を大事にするまちにします。アンケートを参考にしな

がら委員会や情報をもとに宮田工業が試作
2004年11月3日発売しました。

自転車屋さんの技術で生涯点検、シリアルナンバープレート付です。



「相模線に自転車で乗ろう」

2006年度は「相模線に自転車で乗ろう」とサイクルトレインの企画も進めています。

④マイバッグの推進

2002年12月商連は商店街に呼びかけ、全市いっせいにマイバッグデイを行いました。



それまで消極的だった大型店を巻き込み、商連の呼びかけで、消費者団体連絡会・商工会議所・大型店連絡協議会・茅ヶ崎市で構成する「エコ・シティ茅ヶ崎マイバッグ推進会議」を2003年3月に立ち上げました。

全市で毎月5・15・25日はマイバッグデイ、毎月レジ袋辞退者の統計をとり、毎年小学4年生にアンケート調査、情報発信などに取り組んでいます。

レジがない商店はレジ袋を使わないお店も多く、マイバッグの推進はお店屋さんから上がった声でもあります。

商連のマイバッグ推進委員会は、独自に「エコ傘マイバッグ」をおこなっています。傘からマイバッグを作ることも、消費者のみなさんから教わりました。

消費者に呼びかけて不要の傘を商店で回収し、その素材で精神障害者ボランティアグループがマイバッグを作るシステムです。できたマイバッグは商店で200円で販売しています。(2005年9月スタート)

配達でまちを回っているお店が傘を作業所に運び、できた袋の回収を行います。はがした傘の布を洗い、クリーニング屋さんがアイロンをかけてくれます。400枚の注文があり右往左往したり、商店街のイベント、市消費生活センター、学校や自治会から「マイバッグの作り方教室」開催の依頼があったり思わぬ反響に驚いています。不要の傘の回収にも、マイバッグの販売にもお客様とのコミュニケーションが大事です商店だからできることです。

以上紹介した事例は同じ法則で取り組まれています。

*一番環境に負荷が少ない方法であること

*経済が茅ヶ崎で循環すること

*商業者だけでなく、多くの市民、団体といっしょに考え実行すること

*商連・委員会・商店街・商店がつながるようにすること

この原則は次に紹介するコミュニケーションの取り組みも同じです。

3. 歩いて暮らせる商店街、歩いて楽しい商店街づくり ひととまちのコミュニケーションをはかります

市内のいろいろな団体とつながり、まちのコミュニケーションをつくります。季節や地域の行事を守り、まちづくりに生かします。商連は、イベントを商店街に提案し商店街の状況に合わせて選択できるように企画します。

①商店街のカルテづくり（2003年）

自治会に協力をお願いし、市南側19000世帯のアンケートをとりました。これをもとに商店街の診断カルテを作り、商店街ごとのコンセプトを決め、これを基に活動します。今は個店なんでも10%元気アップにもとりくんでいます。地域によっては回収率55%にも及び市民のみなさんの声は商連のすべての事業に生かされています。

②2005年は北側も実施

③七夕笹飾り（2003年から）

里山公園から笹をいただき、商店街に創意工夫を凝らし七夕笹を飾りました。保育園や幼稚園、学校、学童保育などをお願いして子どもたちの願いを短冊に書いてもらい飾ります。里山とまち、子どもたちがつながりました。



保育園の子どもたちがお散歩しながら見に来てくれました

④ゆかたを着てまちのお祭りに出かけよう！（2004年から）

呉服商を中心に地域のお祭や盆踊りの文化を知らせます。市内で開催される盆踊りマップを作成し、今年は自治会・婦人会・商店街などが主催する、どの会場もにぎやかでした。中止されていた盆踊りが復活した地域もありました。

⑤茅ヶ崎オリジナル花火の絵コンテスト

(2005年から)

商連主催第2回花火の絵を募集しました。446枚もの応募があり、15点の入賞作品をえらび、2点の優秀賞は観光協会主催の花火大会当日打ち上げられました。子どもたちの花火の絵をラミネートし、商店街に展示し子どもたちに喜ばれました。家族で見学に来る人が増えまちがにぎやかになります。



⑥茅ヶ崎汁 (2005年から)

「あなたが作る地産地消(茅産茅消)の茅ヶ崎汁」を募集。昨年の消団連との話し合いから生まれました

市民団体茅ヶ崎市食生活改善団体と地産地消の茅ヶ崎汁レシピを募集し、食改善のみなさんと試作、試食し、レシピ集を作りました。



この結果をもとに全市いっせいに行った「歩いて暮らせる商店街、歩いて楽しい商店街」のイベント・抽選会で6商店街が茅ヶ崎汁を作り市民にふるまいました。

茅ヶ崎の商店街づくりは私たちの手で

委員会のほとんどが2000年に基礎をつくり、役員の地道な活動や商店会長のみなさんに支えられて継続・発展してきました。ほとんど知られていなかった商連に市民のみなさんから声がかかるようになりました。多くの団体、市民の方々とつながりました。商店街がまちづくりにとりくむことは大変なことですが、商店のみなさんは消防団や交通指導員、自治会などに参加していて、まちの頼られる存在です。

今、まちは、歩いて行ける範囲で生活必需品が買えない、子どもたちを安全に育てられない。コミュニティが崩壊するなどの問題が生じ始めています。大変なことですが、まちづくりは住んでいる限りずっと続くものです。

これらの取り組みはすぐに結果はでないかもしれませんが、環境と経済のアップは商店街型システムで、まちのみなさんといっしょにまちの問題を解決することで実現できます。商連も商店街も商店も原則は同じです。

大店立地法の影響はじわじわと出ています。大型ショッピングセンターが近隣に次々と出店し、茅ヶ崎を商圈に入れ込みました。大型店ができるたびに商店が1軒、2軒と廃業していきます。

商品の流通の多くが大型店中心になっています。問屋の倒産など個店では商品を仕入れること自体が難しくなっています。商店街の商店はチェーンストア化が進んでいます。生鮮三品を扱う商店は消えつつあります。

8年間の商連の活動に対して環境で売上げは伸びない。なんで酒屋ばかり、自転車屋ばかりという声もありました。事業が多すぎるという声も聞こえます。

社会的には環境やコミュニケーションの取り組みはますます重要になっています。

1本の道があるこの道に必要な商店が張り付き商店街ができる。大型店や全国チェーン店が必要ならそれができる。それが経済だろうといった人がいました。

観光や新規企業を応援する行政が増えていますが、今の商売をしている人がやっていけなくてはまちが壊れてしまいます。日本の商店街はヨーロッパやアメリカと成り立ちや都市計画が違います。

私たちはここに住んで働いています。高齢者が暮らせて、子どもたちが育つやさしいまちをつくる一員でありたいと願っています。